

定植までの管理を省力化できる種子繁殖型いちご「よつぼし」

【1 成果概要】

種子繁殖型いちご品種「よつぼし」は、種子で増殖できることにより親株管理や採苗、育苗労力の削減に多大な効果が期待されています。そこで本県の促成栽培における「よつぼし」の特性や導入効果について検討しました。

なお、本成果では、二次育苗法と本圃直接定植法の2つの栽培体系について検討しました。

(1) 親株管理や採苗、育苗において作業時間を大幅に削減できます(図1)。

- ・二次育苗法では親株管理が不要であり、慣行栽培(栄養繁殖型品種)に比べ作業時間を約28%削減できます。
- ・本圃直接定植法では親株管理に加え採苗、育苗も不要であり、慣行栽培に比べ作業時間を約86%削減できます。

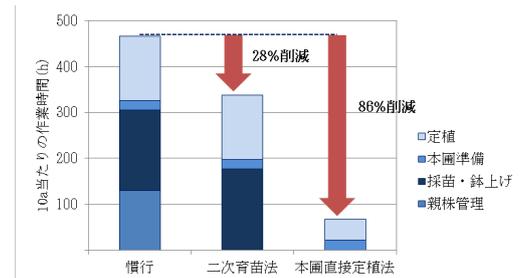


図1 定植までの作業労働時間

(2) 二次育苗法における総収量は「さちのか」より多く「紅ほっぺ」より少ない傾向です(図2)。

「よつぼし」は早生品種であるため、花成促進処理を行わない場合、「さちのか」や「紅ほっぺ」に比べ頂花房の開花が早く、収穫開始も早い傾向にあります。商品果率は「さちのか」や「紅ほっぺ」に比べ高く、商品果1果重は「さちのか」より大きく「紅ほっぺ」より小さい傾向です。

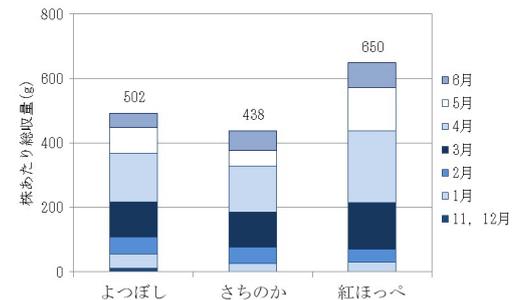


図2 「よつぼし」の二次育苗法と他品種の総収量の比較

(3) 本圃直接定植法では定植期の分散が可能です(図3)。

200穴セル苗の本圃直接定植法では、7月上旬～8月上旬のいずれの定植期においても、総収量に大きな違いがないため、定植期の分散が可能です。加えて定植までの作業時間が大幅に削減できることから、他の夏秋どり品目との組合せ栽培が可能です。

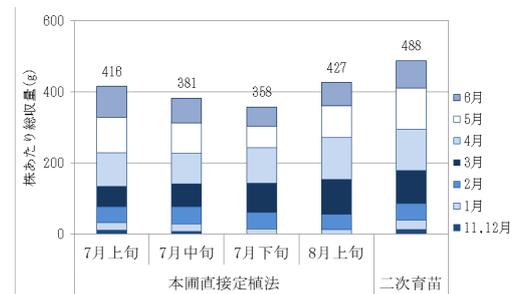


図3 本圃直接定植法の定植時期と総収量の関係

【2 栽培における留意事項】

- ・本圃直接定植法では、総収量が二次育苗法より少ない傾向にあります。また、6月以前の早植えは奇形果多発につながる恐れがあるため注意してください。
- ・「よつぼし」の購入形態はセルトレイが一般的です(令和元年12月現在)。

【3 「よつぼし」をさらに知りたい方へ】

「よつぼし」の栽培方法全般については栽培マニュアル「種子繁殖型イチゴ品種「よつぼし」の特徴と栽培技術」をご覧ください。なお、マニュアルは種子繁殖型イチゴ研究会の会員向けホームページでのみ公開となるため、非会員の方は南部園芸研究室又は農業普及技術課農業革新支援担当から入手してください。